様式２

令和６年度　大学との連携事業つながる学び「みと☆Future College」実施報告書

拠点校名　水戸市立国田義務教育学校

連携大学　茨城キリスト教大学

研究主題　実体験を通して知り、気付き、よりよい生き方を考える児童生徒の育成
～出身国の異なる留学生との意見交換を通して～

１　主題設定の理由

本校の今年度大学との連携事業は今年度３年目となる。児童生徒とは「相手を知ることは自分を知ること」というテーマを共有し、本事業に臨んできた。これは主題設定の基となる、２年前から継続している本校のテーマである。

昨今、国際理解、グローバル、ボーダレスといった言葉を頻繁に耳や目にする。しかし、実際のところ、児童生徒はどれくらいその言葉を肌で感じることができているのだろうか。「言葉は知っているけど、具体的にはよく分からない」というのが多くの子どもがもっている感覚なのではないだろか。のちに示す事前調査でもその傾向が表れている。このことから、児童生徒が「国際理解」について思考を深めるために必要なものは何か、それは世界を肌で感じることができる、実体験であると考える。

今回は、昨年度までとは違い、茨城キリスト教大学が実施している国際交流に関するプログラム「多文化協働演習」に参加するという形での交流となった。留学生の方々の出身国を巡るような設定になっており、パスポートをもって出入国を疑似体験するというものであった。児童生徒は興味をもって英語での出入国のやりとりを楽しみ、各国ブースでの体験に入ることができた。

今回の交流会ではアジア、ヨーロッパなど複数にわたる国の留学生と実際に顔と顔を合わせて話を聞き、また質問や会話をするという実体験ができた。実際に出会った留学生がもつ世界観に触れることで、それまでその国について抱いていた想像とは全く違う現実に驚かされ、それに気付くことで世界の見え方、日本の見え方、自分自身の見え方が変わってくることもあるだろう。実体験に勝る勉強はない。それこそが日本で、世界で、よりよく生きるためのヒントとなることを願い、本主題を設定した。

２　研究のねらい

子どもたちに気付かせたいことがある。それは「相手を知ること」は「自分を知ること」につながるということである。相手の言葉、生活習慣、文化、考え方、生き方、目標、自分（自分たち）は相手にどう見えているのかなど相手の視点を知ることで、これまで自分自身では全く見えていなかった、客観視された自分（自分たち）が見えてくる。相手と自分の「相違

点」や「共通点」を知ることで、世界の中に置かれた自分がこれから何をすればいいのか、自分の立ち位置を考えるきっかけとなる。参加する児童生徒は本校の中核である６・７・８年生とし、今回の体験を自分自身の生き方を考える糧としてほしいと考える。実体験を通して自分自身を見つめ直し、グローバル化、ボーダレス化の渦中にあるまさに今を、よりよく生きることについて考える力を育てることを本研究のねらいとした。

３　実践

(1)　内容　　大学が授業として設定している「多文化協働演習」に参加する。児童生徒は大学生が作成したオリジナルパスポートを携帯し、設置されている各国のブースを選んでそれぞれ入国し、文化、伝統、共生について学ぶ。

(2)　対象　　６年生（15 名）７年生（13 名）８年生（11 名）　合計 39 名

(3)　引率　　山田　浩司　教諭　　須田　哲　教諭
　　水戸市総合教育研究所　中山　聖　指導主事

(4)　期日　　令和６年 10 月 30 日（水）

(5)　場所　　茨城キリスト教大学　１号館ＧＥＡ（グローバルエクスチェンジエリア）

(6)　講師　　・長期交換留学生およびＩＣＨ留学生
　　（韓国、ベトナム、インドネシア、イタリア他 10 名程度）
　　・日本人学生サポーター「多文化協働演習」受講生 20 名程度
　　・コーディネーター「多文化協働演習担当」教員２名
　　「国際交流センター」スタッフ２名

(7)　移動手段　水戸市バス（中型１台、マイクロ１台）

(8)　持ち物　　筆記用具、水筒、ハンカチ、ティッシュ

(9)　タイムテーブル

８：15～８：30　朝の会（各学級）
８：30～８：45　出発準備・トイレ休憩
８：45　教室出発・旧校舎まで歩いて移動
９：00　旧校舎出発
９：45　大学到着　会場まで歩いて移動
10：20～10：40　開会行事
①授業担当者からの話
②留学生紹介
③諸連絡（当日の活動の説明）
10：50～11：15　文化紹介体験
①第１ターン　１０分
移動時間　５分
②第２ターン　１０分
11：15～11：20　まとめ

11：30　　会場から歩いて移動・大学出発

12：15　　旧校舎到着

12：25　　教室到着・給食準備・通常日課

(10)　その他

対象児童生徒に事前事後アンケートを実施し、本事業の効果について検証する。

４　成果（進捗状況と今後の課題）

(1)　当日の活動の様子

・大学の教室にて、教授に国際交流に関する本プログラムについての説明を受けています。

・児童生徒は入国と出国を疑似体験できるように設定され、留学生の出身国を旅することができるように各ブースが設営されています。

Korea(韓国)

Vietnam（ベトナム）

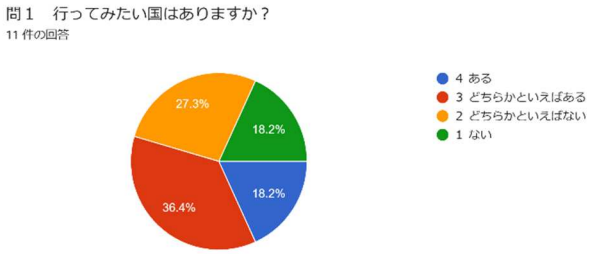
Indonesia（インドネシア）

Italia（イタリア）

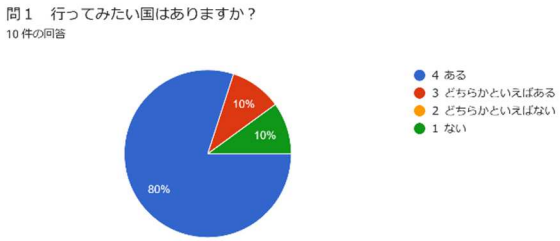
（２）事前調査・事後調査

８年生　行ってみたい国はあるか。

事前

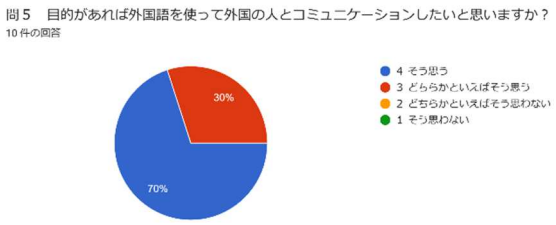


事後

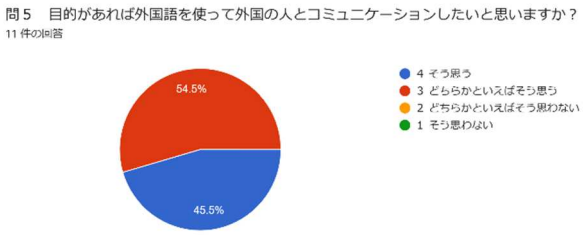


７年生　目的があれば外国語を使って外国の人はコミュニケーションをしたい。

事前

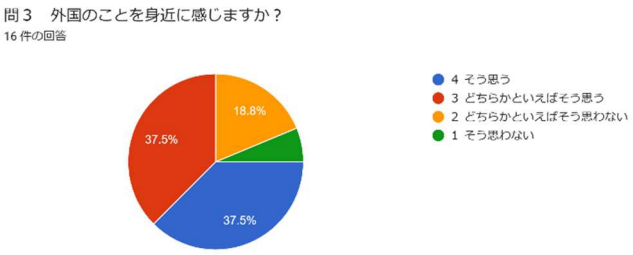


事後

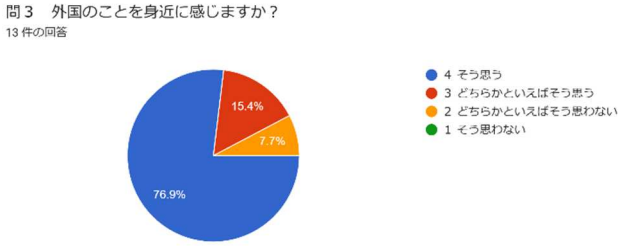


６年生　外国のことを身近に感じるか。

事前

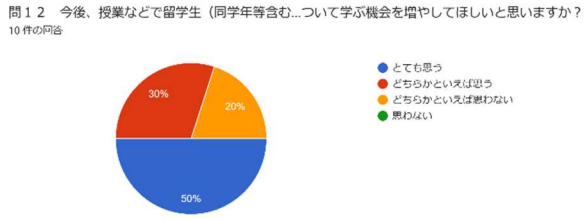


事後

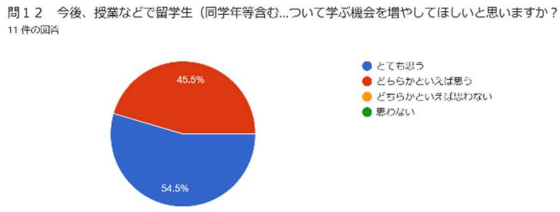


８・７・６年生　　今後、授業などで留学生や日本に住む外国人の方と語学や文化について学ぶ機会を増やしてほしい。

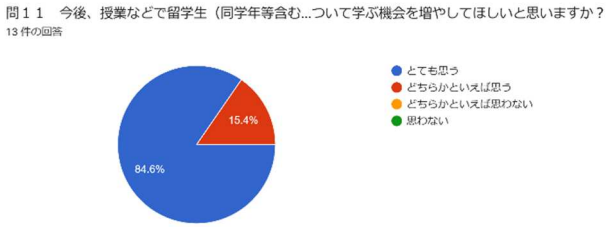
８年生



７年生



６年生



変化が大きかった項目を抜粋・数値は「そう思う」「どちらかというとそう思う」の合計

	事前調査		事後調査	
・行ってみたい国はあるか。	８年生　54.6%	→	90.0%	(35.4%↑)
・目的があれば外国語でコミュニケ―ションしたい。	７年生　100%	→	100%	(内訳が変化)
・外国のことが身近に感じる。	６年生　75.0%	→	92.3%	(17.3%↑)
・今後、授業などで留学生などと一緒に語学や文化について学ぶ機会を増やしてほしい。	８年生　80.0% ７年生　100% ６年生　100%			

(3)　児童生徒の感想

・入国の時に緊張したが、答えることができてよかった。色々な国の文化に触れることができてよかった。

・いろいろな国の食べ物や自然のことがたくさん分かって、色々な国をもっと知りたいと思った。

・いろいろな国の文化や、魅力を知ってさらに海外について知りたいと思うようになった。自分で調べたり、授業で海外の知識や基本的なあいさつなどを知って、いつか実際に直接触れる機会に役立てたい。海外の方が頑張って日本語を話していたように、知っている英語を使って少しでも話してみたい。

・留学生たちの話を聞けて、まだまだ知らないそれぞれの国の特有な食べものや観光地などの魅力を知れて、とてもよい機会となった。

(4)　成果

上記の調査、児童生徒の感想から分かることを端的に述べたい。児童生徒は今回の交流を通して外国について学んだり、外国の方と関わったりすることについて興味関心を高めたことが分かる。これまであまり外国の方と関わる機会がなかったり、外国の情報に触れてこなかったりした児童生徒にとっては英語の授業以外で初めて実際に行ったコミュニケーションかもしれない。そのコミュニケーションから得た情報にはこれまで自分が漠然と抱いてきた外国の文化や考え方、外国のイメージを覆す発見があったと考える。それは同時に自分自身の住んでいる国、日本や自分自身の生活を改めて見つめ直し、問うきっかけになったであろう。本事業のテーマである「相手を知ることは、自分を知ること」を具現化できた素晴らしい実体験となった。

(5)　課題

本事業は今年で３年目となる。今年は本校児童生徒が大学に出向き、大学生の授業の一環としてのプログラムに参加する方法となった。それ自体は有意義な実体験となったことは間違いないが、大学の授業ということ、本校の児童生徒が学校と大学を往復する時間や昼食をどうするか、といった制約があることで、これまで行ってきた児童生徒による日本文化や自分たちの生活について発信することができなかった。過去２年間はお互いの発信と、双方向のやりとりを通して学んできたので、その点においては課題となった。

また、言語の点から一つ分かったことがある。本事業は英語を用いて行うことを一つの目標として取り組んだが、相手が来日している留学生ということで、日本語が流暢かつ留学生としては日本語でのコミュニケ―ションも楽しみたいという実態があり、児童生徒はお互いに一番通じ合えるのが日本語だと分かると、日本語を用いる傾向が強かった。国際理解という点ではそれは自然な事であるので、児童生徒にとって相手が自分の国の言葉を知っていることの意味を学ぶよい機会になったと捉えておきたい。

（文責　須田　哲）